

連載：アメリカ経済史に学ぶ

第5回 スポーツ大国アメリカ

敬愛大学 経済学部
准教授・博士(経済学)
下斗米 秀之

サッカーワールドカップの熱狂も落ち着き、関心は2年後の東京オリンピック・パラリンピックへと移っている。近年の異常ともいえる酷暑への対策、訪日観光客向けの民泊問題、五輪開催中の輸送計画など、解決すべき課題は多いが、東日本大震災の復興を世界にアピールする意味でも大成功を期待したい。

さて日本もスポーツの盛んな国の一つであるが、アメリカにおいてスポーツは、日本人の想像を超えた存在感を持っている。スポーツを通じてアメリカ社会経済の変遷を辿った鈴木透氏の新書（注1）を読むと、アメリカにとってスポーツが「時代の変化を映し出す鏡」であることがよくわかる。

アメリカンフットボール（以下アメフト）はその名前からも典型的なアメリカ型競技で、テレビ視聴率の歴代トップテンは全てNFLの「スーパーボウル」中継である。アメフトが誕生した19世紀末は、「金ぴか時代」と呼ばれる産業社会への転換点である。繁栄の裏では社会の歪みが深刻化し、資本主義や自由放任主義経済からの改革が求められた時代だ。アメフトの競技としての特徴に、1チーム約50人ベンチ入りする大掛かりなチーム構成、細分化されたポジション（攻撃と守備とでは、別々の選手が行う）、プレーの計画性や組織性が重視されることが挙げられるが、これは19世紀末の産業社会の工場労働に求められる分業化・専門化・組織化と極めて親和性が高い。まさに産業社会の分業体制を具現化したような競技なのである。

メジャーリーグの門戸を開きアメリカ社会におけるジムクロウ（合法的な人種分離）の撤廃や公民権運動に弾みをつけたのは、黒人初のメジャーリーガーのジャッキー・ロビンソンの活躍であった。今日NBAのマイケル・ジョーダンやゴルフのタイガー・ウッズら黒人アスリートが子供たちのロールモデルとして畏敬の念でみられるのも、黒人差別と闘った先人たちの遺産である。また第二次大戦中にメジャーリーガーが徴兵されたことにより、リーグ存続の危機を救ったのは、女子プロ野球の存在であった（注2）。その後の冷戦構造は、スポーツ世界でも共産圏に対する競争意識を高め、人種差別と女性蔑視の両方を同時に解決する象徴として黒人女性アスリートに期待が高まった。アメリカにおけるスポーツの歴史とは、人種の壁を打破し、性差別撤廃のための舞台を提供してきた歴史でもあった。町をあげての大学スポーツの盛り上がりも、アメリカにとってスポーツが地域住民のための文化公共財であり、人為的集団統合を深化させる力を持っていることの何よりの証明だ。

そもそもオリンピック・パラリンピックの開催時期もアメリカの放映権の都合によるところが大きい。これらアメリカスポーツのもつ様々な力にも注目しながら開幕を待ちたい。

—以上—

注1. 『スポーツ国家アメリカー民主主義と巨大ビジネスのはざままで』中公新書、2018年。

注2. 詳しくはトム・ハンクスやマドンナが出演する映画『プリティ・リーグ』が参考になる。